千田左馬父子と遠藤大学

3

後藤寿庵の用水堰開鑿は、キリシタン弾圧の時世にあって、志なかばで中断されている。今日「寿安堰」と呼ばれている上、中、下の各堰の相当部分は、寿庵の意志を継いだ人びとによって開鑿されたのである。

その代表的な先人が千田左馬父子と遠藤大学であった。

千田左馬は通称であり、左馬之介、勝安と称し、本来は葛西氏の系譜で、いずれかの代で帰農したキリシタン信者といわれている。

千田左馬の関村は現在の前沢町古城の一部分で、当時の仙台藩伊具郡角田（宮城県）の領主であった石川大和の知行地である。寛永元年（一六二四）は大旱ばつで、「伊沢近郷天水田多きため稲作枯死する故」、千田左馬は自分の村と、外の七ヵ村に水を引くことを領主に願い出た。

寛永二年（一六二五）五月十五日、領主石川大和から許可の内諾を得て、翌寛永三年（一六二六）から本格工事を始める。寛永八年（一六三一）寿庵が福原を去って七年を経て、現在の「寿安上堰」が完成する。

前沢の古老たちが「左馬堰」とも呼ぶこの堰は、小山村大違から総延長二〇キロメートルにも及ぶものであった。左馬はその功績を石川大和から認められ、四人扶持、太刀、具足などを拝領し、関村の肝入となる。

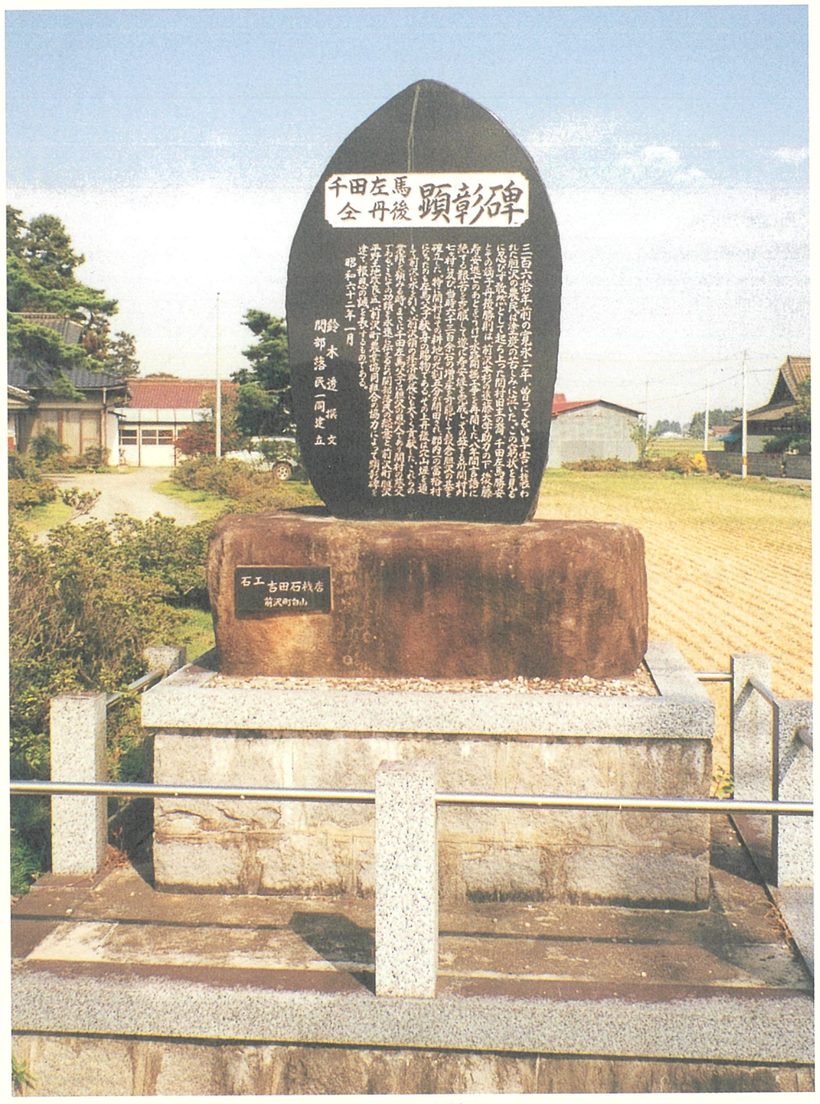
千田左馬の息子である勝利、平蔵こと後に丹後もまた、「用水を前沢へ引越し功労につき」とあって、親子二代で寿安堰を継承し、用水堰開鑿にあたったことを知ることができる。

ところで、千田左馬が領主石川大和から堰開鑿の許可を得た文書の中に、「当郡八ヶ村肝入」の印鑑を用意してくるようにとの文面がある。このことは開鑿のリーダーが確かに千田左馬であったかもしれないが、水下（水利受益）の村々の有力者による援助も大きかったことをうかがわせる。

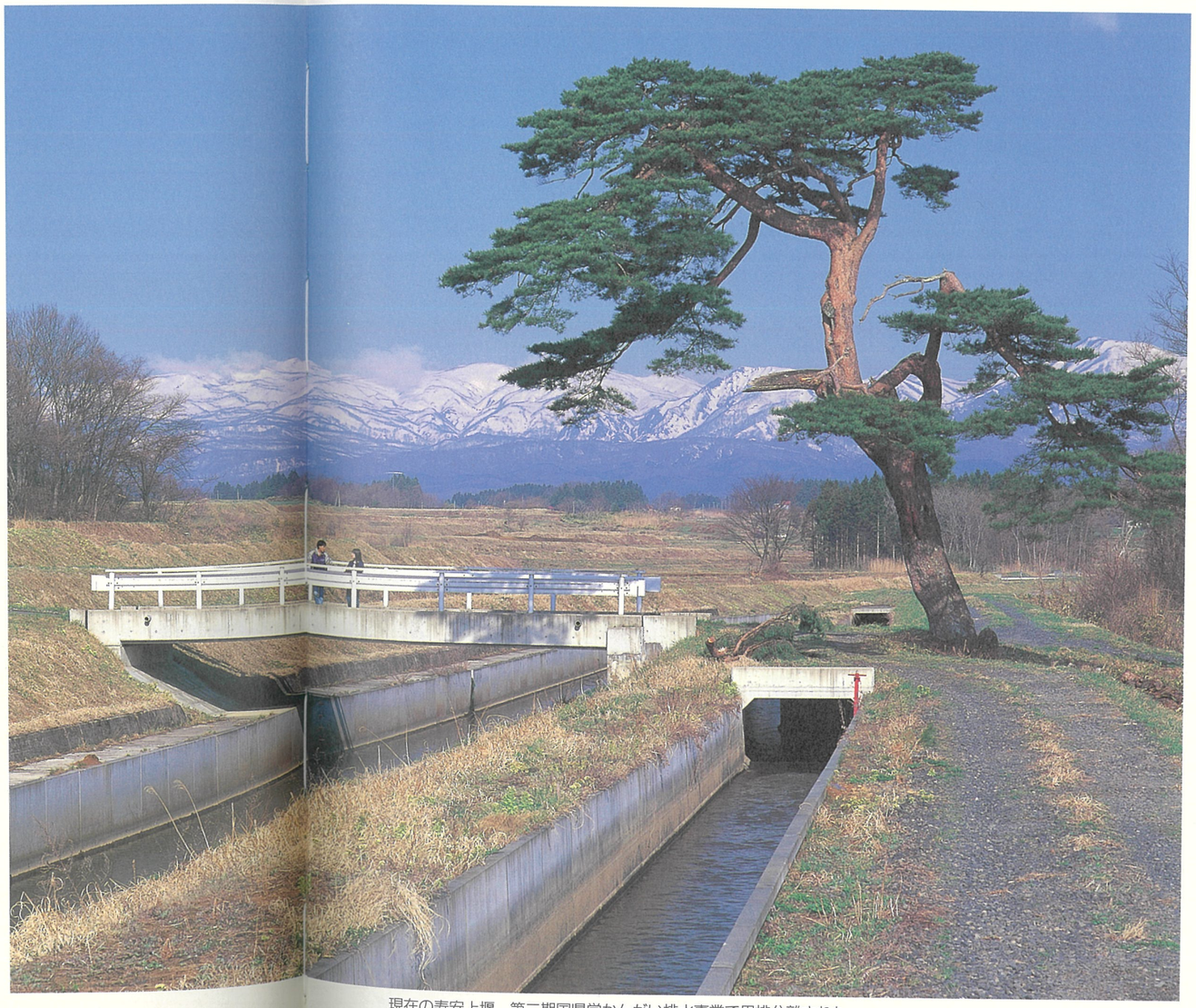
「徳岡村　肝入油地屋敷太郎兵衛」ほか、前沢村、中畑村、上麻生村など各村の人びとの名前や、「右四ヶ村手伝人夫にも水相分候」とあって、八人の肝入ばかりではなく、水不足に悩む多くの協力者、開拓意欲に燃える多くの賛同者がいたであろうことは充分に予測できるのである。

千田左馬と共に、後藤寿庵の意志を継いだ人物に、前沢の遠藤大学がいる。大学もまたキリシタンと伝えられているが、それ故にか、出自をはじめとしての事績の究明されていない人物である。

おそらく、千田左馬の片腕となって堰の開鑿に尽力してきた人物なので、左馬と共に後世までその名前が語り伝えられてきたのであろう。よく知られている話として、前沢本杉の遠藤大学の居地や、目呂木、大桜の人びとは、「大学様の田植が終わらないうちは、田植をしなかった」というエピソードが伝えられている。



千田左馬、丹後の顕彰碑（昭和62年前沢町古城地内に建立）


現在の寿安上堰、第二期国県営かんがい排水事業で用排分離された。